

研究不正雑感

西川 恵子

日本学術振興会 監事
千葉大学 名誉教授



昨年千葉大学を定年退職し、現在、日本学術振興会（学振）でボトム・アップの研究の振興や若手研究者養成事業のお手伝いをしている。オフィスのデスクには、毎日、新聞の切り抜きが届けられ、学術に関する諸々の情報の概観を捉えることができる。この1年、「研究不正がなんと新聞紙上を賑わせたことか……」が率直な感想である。

研究不正の問題は、研究費配分機関として学振の業務にも影響を与えることが懸念される。そうした立場上、STAP細胞事件は表向きには一段落し、この問題を当初から取材を続けてきた科学担当記者による単行本（須田桃子著「捏造の科学者－STAP細胞事件」）が出たので、早速読んでみた。世界三大研究不正の一つとされているシェーン事件（2000～2002年ベル研を舞台に起こった高温超伝導に関する論文捏造事件）を取り扱った本（村松秀著「論文捏造」）も、並行して読み進めた。10年余の時間の開きがあるが、2つの事件を比較してなんと多くの共通点があるかというのが、一番の感想である。例えば、①博士号取得直後の経験・実績の浅い研究者が当事者であったこと。②罪悪感をほとんど感じていないこと。まるで夢の世界に生き、こうあって欲しいという「願望」がそのまま「実験結果」になったこと。③その「成果」が社会にとって画期的と期待される内容であったこと。④種々の事情で所属した組織が、華々しい成果とスターの出現を強く求めていたこと。⑤当該分野での第一人者が、指導者または共同執筆者であること（水戸黄門の印籠に相当）。⑥問題になっている論文が最初に掲載されたのが商業誌のNatureや

Scienceであったこと等々である。

我々の分子科学を中心としたコミュニティでは、こうした研究不正は起こりえないと思ってきた。しかし、上記の2書を読んでいて、まかり間違えば我々もすぐその淵にいと末恐ろしくなった。それは、「再現性」の問題である。捏造や改竄が疑われると、決まって問題になるのは実験結果の再現性である。我々分子科学を専門とする研究者のメインテーマは、簡単には人が追従できないような発想や方法論の構築、世界唯一の実験装置の製作、それを使つての自然現象の探索と物作りである。我々は、それを研究のオリジナリティと呼び、最も誇りとしている。筆者自身も手作りの装置で、ささやかながら世界中でまだ誰も真似の出来ないデータを出している。こうした、簡単には再現性の得られないデータが発表されても、我々は通常疑問をさしはさまない。何故だろうか？ 我々の研究テーマが基礎的・基盤的で、すぐイノベーションという出口と直結していないこともあるであろう。実験条件の設定が厳密に制御しやすく、個々の試料の差であるとは我々は主張しないこともある。何にもまして、研究者間の底流に在る信頼関係と思われる。言い換えれば、性善説を暗黙の基盤としている。研究者が当たり前の倫理意識を持っていることを前提に、研究者間の信頼関係があるからである。分野にも依るが、こうした信頼関係が徐々に崩壊して来ているのが昨今の現状である。

研究不正は勿論であるが、研究費の不正使用も大きな問題になっている。これらは確実に、研究費の削減や、研究の枠組みや規制の強化など負の部分として現

れる。皮肉を交えて言うならば、もし今回の事件がプラスに働くことがあるとするならば、余りにも出口指向の研究がもてはやされてきたことへの認識と反省とすることにならうか？

社会全体の発展が頭打ちとなっている現在では、科学技術振興関係の予算は大枠では減少傾向にあり、分野間の予算取り合いが益々強まっている。特に、すぐに出口に直結するイノベーション創出への傾斜が顕著である。学振では、科研費を主体として、研究者の主体性を尊重したボトム・アップの研究への支援と多様な学術の芽を育てることを第一義とし、そのための方策や活動を活発に行っている。現場の研究者の方々も、是非、ボトム・アップ研究の重要性と必要性について機会あるごとに声を上げていただきたい。

にしかわ けいこ

日本学術振興会 監事、千葉大学名誉教授・特任研究員、理学博士

1948年静岡県出身。1974年東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程修了。1981年理学博士。

1974～1991年 学習院大学理学部助手。1991～1996年 横浜国立大学教育学部助教授。

1996～2014年 千葉大学大学院自然科学研究科（改組により後に融合科学研究科）教授。

2014年千葉大学名誉教授。2014～日本学術振興会監事、千葉大学特任研究員を兼務。

日本結晶学会賞(1988)、第18回猿橋賞(1998)、第64回日本化学会賞(2012)、文部科学大臣表彰(2012)、紫綬褒賞(2013)、分子学会賞(2014)を受賞。